新審査会員～私の抱負～

秋山寿子
（札幌）

新しい出会いと発見を

このたびは審査会員に推挙いただき、大変光栄に思っております。責任の重さに身の引き締まる思いです。

表現する喜びを感じながら、新しい出会いや発見を求めて、新たな気持ちで写真と取り組んで参りたいと思っております。今後とも御指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

馬場和美
（旭川）

「不易と流行」を見極めて

上川支部の発足と同時に道写協に入会し、第28回写真道展で初入選しました。

以来旭川支部に移籍してからも，志賀芳彦顧問を始め、諸先生の御指導を頂き、支部での交流を通して多くを学ばせて頂き、感謝の気持ちでいっぱいです。

写真界も現在は、変化とスピードの時代ですが、今後も先輩会員諸氏に学びながら、「不易と流行」を見極めつつ務めていきたいと思います。

随想＝私の一枚
〈シリーズ―60〉

審査会員　**大崎　和男**（帯広）

「命」

ありし世のニューヨークツインタワー

乾板の1枚撮りからブロニー、35㎜、そしてデジタルと日進月歩の写真技術の進化は喜ばしいことだが、撮影マナーの悪さが目にあまることもある。

先頃、写真家・テレビ局と名を散らす者が、小動物の巣穴を叩き、加えて爆薬を仕掛ける等の横暴な振る舞いに憤りをおぼえた。また写真ツアーの講師がいきなり「この木は邪魔だ」と生徒の前で伐採したという。自分の教室の生徒を逃がさないための策略か。ごく一部の心無い者の行動で撮影者全体の品位が汚されるのはたまらない。

景勝地の「立入禁止」の立て札は写真愛好家達の加害行為と言っても過言でない。美瑛の丘の「哲学の木」伐採も嘆かわしい。

大事なのは自分の直感を信じて感動したものを撮ること、テーマが見つかれば長いスパンで創作出来るだろう。個々の活動意欲を引き出し高め合う努力を続けたい。

閑話休題（それはともかくとして）

「命は自分で守る」と言い張ってニューヨークに移住した娘、かれこれ4分の1世紀以上前にもなる。今はネット社会で、簡単に連絡を取り合えるが、遠くにいるのに違いはない。

掲載写真は25年前「ニューヨークの印象」と銘打ち帯広のデパートで個展を開催した。その時の1枚だ。

初めて訪れたとき、娘の部屋から見えたツインタワーがテロ事件で姿を消してしまった。

当時北海道新聞から娘に取材依頼があり現場写真が送られてきた。高熱に耐えきれなかったのであろう人々が蟻のように降ってきた。なかには恋人同士が手をつなぎ合って飛び降りる光景もあった。

事件後、ろうそくや花を供えて祈る人々の姿があちこちで見られた。行方不明者の顔写真に添えられたメッセージが涙を誘う。人種を越えたボランティアの輪が広がり団結が増したという。

娘のことこまやかな現地報告が北海道新聞の記事になり報道された。これこそ写真力に他ならない。このとき娘は「命は自分で守り切れない」とぼやいた。

写真を始めて60年にもなる。

いまだに気に入った作品は出来ていない。ただ馬齢を積み重ねてきたに過ぎないが、命のある時間は限られている。

五感の働きが鈍らないうちに、これぞという言う会心の1枚に出会いたいものである。

著者紹介――――――――大崎和男

画家、写真家、彫刻家、陶芸家、俳句と多彩。以前道新にコラムを連載。HPあり。